

# 日本國天皇家論 3章 日本國天皇家

## 日本書紀は日本國の史実

# 日本國の京・藤原京

## 藤原京の発掘調査

藤原京はどこに存在したのか。ごく近年までその正確な所在位置すらわからない謎の京であった。

藤原京の発掘調査は昭和40年代から本格的にはじまりましたが、ようやく全体面積の10%をこえたところですが、まだまだ調査は続きます。出土する遺物も多量で、様々な種類があり、これらの整理は現場の発掘以上の手間と時間がかかります。当調査部では調査研究の成果を公表するため、発掘現場の説明会や報道発表、庁舎展示室の公開を行っています。また、遺跡が歴史学習の場となるように復元整備もすすめています。  
(「飛鳥藤原のみやこ」奈良国立文化財研究所)

発掘の苦勞がうかがえる。藤原京は古代最大の京である。藤原京は大極殿・朝堂院・内裏を中心とした条坊都市であった。

1300年前の首都・藤原京の中心、現在でいえば皇居と国会議事堂と霞ヶ関の官庁街を合わせたところが藤原宮です。都の中央約1km四方を占め、まわりは高さが5.5mある瓦葺きの塀がめぐり、各辺には門が3ヶ所ありました。そして、塀に並行して内堀と外堀がつけられていました。宮の内部は、中央に政治・儀式の場である大極殿、貴族・役人の集まる朝堂院が南北にならび、大極殿の北は天皇の住まいの内裏でした。

大極殿と朝堂は宮殿ではじめての瓦葺きで、礎石の上に柱がたつ建物です。大極殿は、当時最大級の建物でした。これら中央の区画の両側は官庁街です。日の出前から出勤した役人たちが、ここで政治の実務を担当していました。中央部に接して一辺70mの塀で囲った四角い区画の役所が南北に並び、その外側は大きな区画の役所で、長い建物が建つことがわかってきています。  
(「飛鳥藤原のみやこ」奈良国立文化財研究所)

条坊都市には貴族・役人の住居、公設市場、寺院などが計画的に作られていた。京の中心に南北に朱雀大路が走り、東を左京、西を右京と呼び、大路の間は小路が通され、その路で囲まれた区画は坪(町)と呼ばれていた。東西5.3km、南北3.186kmという巨大な都市である。

## 紀寺

『飛鳥藤原のみやこ』(奈良国立文化財研究所作成)によれば藤原宮の南、左京に存在する寺は「紀寺」とされている。「紀寺」とは「紀氏」の寺であろう。「紀氏」とは「姫氏」である。つまり「紀寺」は「姫氏の寺」である。「姫氏」の寺が宮殿の南の中心に位置するのは「姫氏」がこの京の建造に大きく関わったからであろう。この藤原京以前に九州には太宰府が存在した。この京は「姫氏」が造営した京である。「姫氏」が築いた神籠石(実は水城)

や太宰府の水城、大野山城などを見ても分かるように優れた土木技術を持っていた。藤原京は太宰府をモデルとして土木技術に優れた姫氏が建造の中心的な役割を担ったのであろう。

## 紀氏の権勢 物語る…… ぶらい日本史

古代豪族・紀氏一族らの墓とされる岩橋千塚古墳群は5世紀後半から7世紀初めに築かれた。61ヘクタールの特別史跡内に約430基、周辺を含めると700基を越え、古代日本最大級の〈共同墓地〉として知られる。和歌山県立紀伊風土記の丘として整備され、うち14基は石室内部を公開している。全長86メートルで県内最大の前方後円墳、大日山35号墳の墳丘に立つと、市内が一望できる。晴れた日には遠く淡路島も望め、紀氏の長の墓にふさわしい。近年の調査で、飛ぶ鳥や両面に顔がある人物など類例のない埴輪が出土。真の継体天皇陵とされる大阪・今城塚古墳のものによく似た家形埴輪も見つかって「紀氏の実力や大和政権との深い関係がうかがえる」と山本高照・紀伊風土記の丘学芸課長は語る。中には10メートルに満たない小さな円墳もあり、幅広い階層の人たちが葬られたのがわかる。古墳群の意義や魅力を広く伝えるために、今年から解説ボランティアの養成が始まった。36人が来年度デビューを目指して猛勉強中だ。 (早川保夫) 2010 11 3 読売

岩橋千塚古墳群についての記事である。この古墳群は紀氏のものである。5世紀後半から7世紀初めに築かれたものといわれる。藤原京址に発掘された紀寺の位置は京の中心に存在する。紀氏(姫氏)が日本国において重要な位置にあったことをしめす証拠であろう。

## 木簡

### (1)漢方薬

「商陸(しょうりく)」「升麻(しょうま)」「車前子(しゃぜんし)」「西辛(さいしん)」「久参(くじん)」「大黄(だいおう)」「麦門冬(ばくもんとう)」「竜骨」などの木簡がある。これらの漢方は中国と深い繋がりがあったことを示す。

### (2)官位

「大属従八位上津史岡万呂」は官位が示される。「大属」という官位。この官位は古代(九州)天皇家にはない。

### (3)地名

藤原京遺跡は平坦である。京は長年、人々が暮らしていた土地の上に新都を造営していたと云われる。まず運河を堀り、大道を作ってから都の造営に取りかかった。都市計画の中にあつた墓地が丁寧に扱われている。それは「清掃されていた横穴」と記録されている。(「飛鳥藤原の都」狩野久・木下正史 岩波)  
木簡から「左京小治町」という地名があつたことが分かっている。藤原京では地名に「町」を使っていた。「町」は「記紀」のどこかをひっくり返しても、登場しない。「左京小治町」なんて、しゃれた現代風の地名ではないですか。

### (4)「評」

1967年に出土した木簡には「己亥(699)年10月上挾國阿波評松里」と記されていた。この木簡の発見により、これまでの地方行政組織は「郡」でなく「評」であつたことが明白となつた。だが問題はここから始まる。ではなぜ、「評」と「郡」の二つの行政区名が存在したのか。またなぜ「評」から「郡」へと改変されたのか。

## 富本銭

(1)飛鳥寺の東南にある「飛鳥池」溜め池一帯に、当時の最先端技術の生産工房跡があつた。「飛鳥池工房」と呼ばれる。その跡から、金・銀・銅・鉄製品、ガラス玉・玉類・漆製品が発見された。その中に日本最古の貨幣が出土している。「富本銭」である。この「富本銭」については日本書紀は何も記していない。「富本」と名前を入れた貨幣は我が国最初の貨幣である。藤原京では市が立っていたことを裏付ける木簡が出土している。その市における通貨は「富本銭」だった。一つの国家に二つの通貨は存在しない。もし二つの通貨が流通していればそれは二つの国家が存在することを意味する。現代においても「円」と「ドル」が一つの社会に流通していれば円の国家日本とドルの国家アメリカが存在することを意味する。

(2)「飛鳥池工房」から「富本」銭が出土した事実は次のように理解されている。

天武天皇の時代(683年)に銀銭を禁止し、銅銭の使用を命じる”詔”が出されている。その銀・銅銭は長らく謎とされてきたが、飛鳥池遺跡の発掘調査で、銀銭が銀地金の無文銀銭・銅銭が鑄造貨幣「富本銭」であることが明らかになった。律令国家の体面を整えるために、中国式の鑄造貨幣が発行されたのである。藤原京も終わりに近い708年(和銅元)には、全国的な流通をめざして和同開珎の銀銭・銅銭が発行された。  
(「藤原京と京」奈良国立文化財研究所発行)

- ① 天武紀の「銀銭」とは出土した無文の銀銭であろう。その後、「富本」と名前を刻んだ銅銭が鑄造された。天武683年の詔はこの「富本」銅銭の使用を命じたものと考えていいであろう。
- ② しかし、「富本」銅銭がすでに通貨として流通している国家において、更に全く新たに「和同開珎」を流通させることはない。国家に通貨は一つである。奈良の古代社会で「富本」が通貨として流通していた。そこに新たな貨幣「和同開珎」が通貨として登場した。もしこのように全く異なる貨幣が二つ流通することが生じたならばそれは「富本」を通貨とする国家が減び代わって「和同開珎」を通貨とする国家が誕生したことを意味する。
- ③ 通貨は国家である。A通貨はA国家を現し、B通貨はB国家を現す。富本銭は日本國の通貨で、和同開珎は近畿天皇家の通貨である。富本銭に代わって和同開珎が通貨となったという背景には日本國が減びて近畿天皇家が支配者となったという政変が存在した。

## 藤原京の真実

藤原京の発掘調査の記録は「飛鳥藤原の都」(狩野久・木下正史)に詳しく述べられている。その調査記録を検討してみましょう。

まず第一に、薬師寺と大官大寺の伽藍中軸線が条坊の中心線とほぼ一致することが確認されたことである。薬師寺の建立が発願されたのは天武九(680)年にさかのぼり、その後の記事を欠くが、少なくとも持統二(688)年には国営の大法会である無遮大会を薬師寺でやっているから、このころにはある程度の伽藍が整っていなければならない。つまり藤原京が持統四年になってはじめて計画、建設されたのでは前後が逆転してしまう。また、天武天皇の墓、大内陵は持統元(687)年十月に造営がはじまっているが、その位置はほぼ藤原京の中軸線の南延長上にあることが確認できる。藤原京を意識して位置を定めたとすれば、これまた時代が前後する。  
(「飛鳥藤原の都」p119)

### 「薬師寺」が条坊に収まる意味

発掘調査は、「薬師寺」と「大官大寺」の伽藍中軸線が条坊の中心線とほぼ一致するという。これは藤原京が先に造営されて、その後に「薬師寺」と「大官大寺」が建立された事実を表している。

日本書紀によると、薬師寺建立発願は680年(天武九年)である。従って藤原京は薬師寺建立(680)以前にすでに存在した。だが問題は藤原京「薬師寺」が天武誓願の薬師寺ではないという所にある。天武が680年に建てた薬師寺は太宰府である。藤原京ではない。藤原京薬師寺が条坊に治まるのはむしろ薬師寺が藤原京造営後に作られたことを意味するが薬師寺建立は680年ではない。記録はないが天武薬師寺以前であろう。

「藤原京が持統四年になってはじめて計画、建設」されたという事実はない。持統天皇が造営したのは藤原京ではない。持統天皇が奈良に作ったのは「藤原宮」である。万葉集も「藤原宮」と明確に記している。「京」と「宮」は根本が異なる。「京」は都市である。「宮」は住居である。690年に持統天皇は「宮」を作り始めた。この時すでに藤原京は存在した。持統天皇は藤原京の中に「宮」を作った。それを「藤原宮」という。

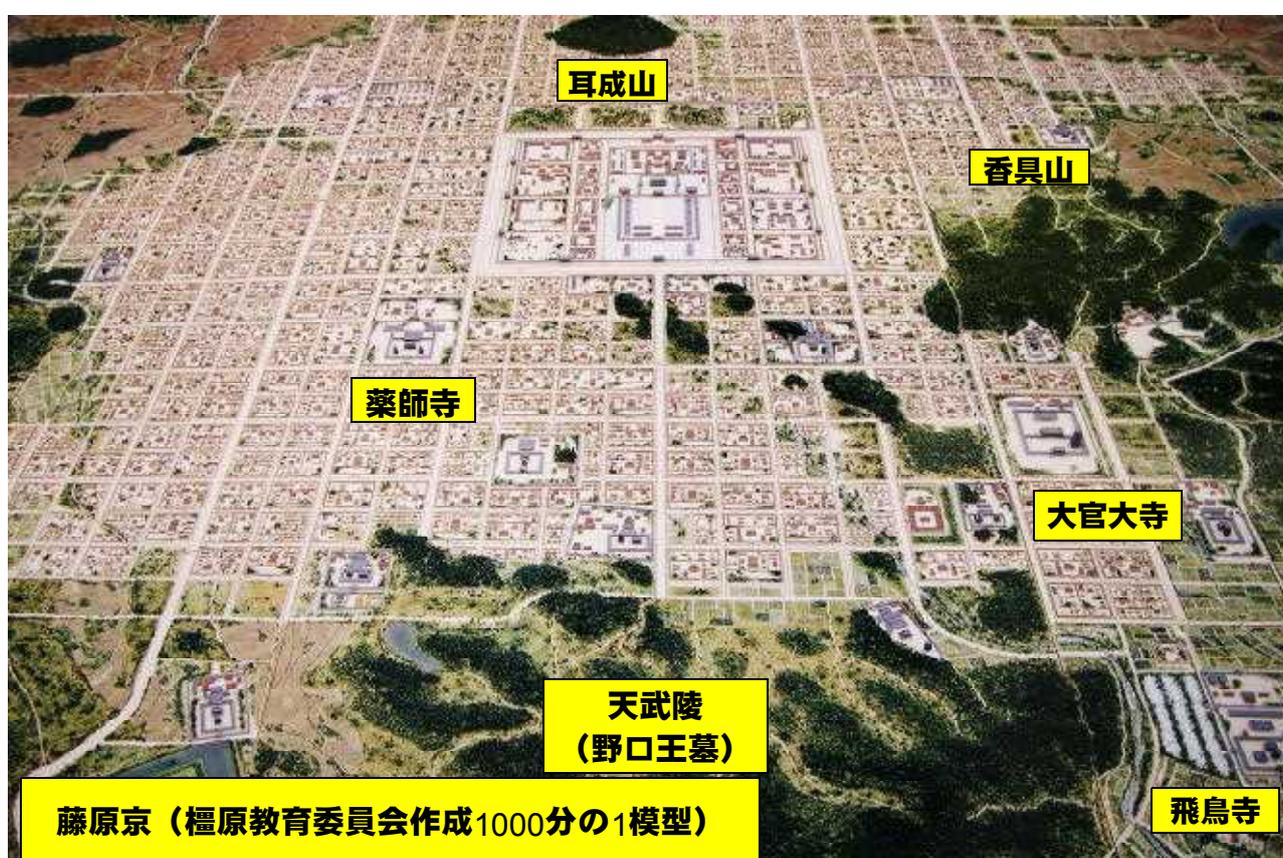
### 条坊の中軸線延長上にある陵は「天武陵」ではない

日本書紀では天武天皇陵(大内陵)の造営は持統元年(687)である。そして持統二年の冬11月天武を「大内陵」に埋葬した記事がある。現在その「大内陵」に治定されているのは藤原京の南にある陵墓である。この陵

墓は藤原京の中軸線の南延長線にある。むろんこの陵は藤原京がすでに存在した時代の陵墓である。だが江戸時代、天武・持統陵は五条野丸山古墳(見瀬丸山古墳)に治定されていた。現在「天武陵」と治定されている陵は「野口王墓」と呼ばれていた。この古墳が1235年に盗掘され、石室の様子が詳細に記録された。明治13年に京都栴尾の高山寺で発見された『阿不幾乃(あおきの)山陵記』である。この書によって明治14年に「野口王墓古墳」が天武・持統陵と治定されたという経過をもつ。

だがこの陵は天武が埋葬された「大内陵」ではない。天武は太宰府に居た。そして太宰府大極殿で亡くなった。皇后持統の挽歌は「神岳の紅葉」を詠っている。「神岳」とは宝満山である。687年に築造が始まった大内陵と呼ばれる天武陵は奈良ではない。太宰府である。

天武が亡くなった。その後皇太子草壁皇子も亡くなった。持統はその四年、太宰府を去り奈良遷都を決行する。持統即位は奈良藤原京大極殿である。持統四年四月の記事、「京と畿内の耆老・耆女、五千三十一人に、稲、人ごとに二十束賜ふ」に於ける「京」とは藤原京である。持統は即位の祝いとして藤原京と近畿の老人に稲を贈った。この時、持統は太宰府で天武の埋葬を済ませ故郷奈良藤原京に帰っていたのである。藤原京は持統以前に存在した日本國の京である。



## 岸俊男氏の考察

「飛鳥藤原の都」(狩野久・木下正史)には岸俊男氏の考えが述べられている。

この矛盾は解消されなければならないであろう。ここにたって、さきにあげた「日本書紀」の天武天皇の時代の新都探索の動きに岸俊男は注目する。とくに注意される記事は、天武十三(684)年三月の「天皇、京師を巡行して宮室を定む」である。

「日本書紀」の編者は、この宮地がどこか、なにも注釈を加えてはいないが、これこそ藤原宮そのものではないか、岸はこう考えた。持統四(690)年に藤原宮の造営が開始されるように見えるのは、天武天皇の病死により、新しい都造営が中断したものをこの時再開したのだと解すれば、さきの矛盾はいちおう氷解する。天武時代の政治改革の路線にあつた新都建設計画、それにもとづいて、持統天

皇は「新益京」の造営を現実のものにした。両天皇が指向した一貫した政治改革の動向をかんがえれば、首肯できる見解といってよい。

岸氏の理解を整理してみよう。

- (1) 天武十三(684)年三月、天皇、京師を巡行して宮室を定むという記事は新しい京を作ろうという計画である。天武は684年に都作りを計画・着工した。その都が新益京である。新益京とは藤原京である。
- (2) 天武が亡くなったあと持統が引き継いだ。天武が684年に造り始めその死によって中断した都造営を持統が引き継ぎ、持統四年(690)に再開した。

しかしこの岸氏の理解には幾つか誤解がある。

- (1) 天武十三年に天武が造ろうと計画したのは天武の宮室(住居)であって京ではない。
- (2) 持統が持統四年に造営を始めたのは持統の宮室(住居)であって京ではない。
- (3) 天武の宮の造営は太宰府での出来事である。持統の宮の造営は藤原京である。持統の宮の造営は藤原京の中でこの時藤原京は存在していた。持統はすでに存在した藤原京の中に宮(住居)を作ったのである。
- (4) 「新益京」とは藤原京ではない。新益京とは「新しく益す(増やす)京」という意味である。つまりすでに存在した藤原京に替わる新しい京を造るという意味である。持統が計画した新益京とは平城京のことである。

## 藤原京は日本國天皇家の京

藤原京は持統の時代のはるか以前に存在していた。ではいかなる国家がこの京を造ったのか。この本質的な問いに答えなければならない。現在の発掘は全体の僅か10%という。やがて新しい事実が新しい真実を明らかにすることであろう。藤原京はいつ造営されたのか。その明確な記録は日本書紀にはない。本来であればこの京の造営記録はこと細かく記録されていなければならない。平城京に先立って奈良に造営された大藤原京である。

## 大化の新国王

六月十九日、天皇・皇祖母尊・皇太子、大槻の樹の下に、群臣を召し集めて、盟日はしめたまふ。天神地社に告して曰さく「天は覆ひ地は載す。帝道唯一つなり。而るを末代澆薄(うすら)ぎて、君臣序を失ふ。皇天、手を我に仮りて、暴逆を誅し殄(た)てり。今共に心の血を瀝(した)づ。而して今より以後、君は二つの政なく、臣は朝に弔あること無し。若し此の盟に弔かば、天災し地妖し、鬼誅人伐つたむ。皎(いちじる)きこと日月の如し」とまうす。天豊財重日足姫天皇の四年(645)を改めて、大化元年とす。

(日本書紀・孝徳天皇)

この言葉が、645年日本國王に新しく即位した王の言葉である。國王は、「皇天、手を我に仮りて、暴逆を誅して」と「尚書伊訓」の文を引いて述べている。蘇我蝦夷一族を自らの手で滅ぼした。であればこの王が蝦夷・入鹿打倒の中心にいた人物である。その人物が王位を継ぎ、年号を「大化」として政治改新を行ったのである。

## 大化の改新

大化元年(645)秋七月、十二日に、天皇、阿倍倉梯萬侶大臣・蘇我石川萬侶大臣に詔して曰はく、「當に上古の聖王の跡に遵ひて、天下を治むべし。」とのたまふ。

新しい王が即位して、年号を「大化」とする。「上宮聖王」が亡くなったのが622年であるから、23年後にこの王が即位した。王は「上古の聖王の跡を守って政治を行う」と宣言した。23年間、蘇我一族の専制の後、国内刷新していかなければならない状況で即位した。日本書紀には「大化」「白雉」と元号が登場するが、この元号は古代(九州)天皇家の元号ではない。古代(九州)天皇家の元号は天武が定めた「朱鳥」が最初である。「法興」「大化」「白雉」と続く元号は日本國の元号である。

「法興」は上宮聖王の代の元号である。「大化」は蘇我一族を滅ぼした王の元号である。上宮聖王は仏教を国教とするべく物部氏と戦い勝利後、蘇我氏が上宮政権の中心を担った。上宮聖王亡きあと、「山代王」が即

位するが叔父である蘇我氏は政権を牛耳、専制が続く。その蘇我一族を滅ぼした王が天皇親政の「大化の改新」を行った。645年、「大化の改新」の目的は統治機構の変更にあった。国王は大化二年(646)に詔勅を出した。

大化二年(646)の春正月一日、賀正礼畢(みかどをがみのことをはりて、即ち改新之詔(あたらしきにあらたむるみことのり)を宣(のたま)ひて曰はく、「其の一に曰わく、昔在(むかし)の天皇等の立てたまへる子代の民(おほみたから)・處處(ところどころ)の屯倉(みやけ)、及び、別(こと)には臣(おみ)・連(むらじ)・伴造(とものみやつこ)・國造(くにのみやつこ)・村首(むらのおびと)の所有(たもて)る部曲(かき)の民・處處(ところどころ)の田荘(たどころ)を罷(や)めよ。仍(よ)りて食封(へひと)を大夫(まえつきみ)より以上(かみつかた)に賜ふこと、各差(しな)有らむ。降りて布帛(きぬ)を以て官人(つかさ)・百姓(おほみたから)に賜うこと、差有らむ。又曰わく、大夫は、民を治めしむる所なり。能く其の治(まつりごと)を尽くすときは、民頼(かうぶ)る。故、其の禄(たまもの)を重くせしむることは、民の為に所以(ゆえ)なり。

## 条坊都市の存在

其の二に曰わく、初めて京師(みさと)を修め、畿内國(うちづくに)の司(みこともち)・郡司(こほりのみやつこ)・関塞(せきそこ)・斥候(うかみ)・防人(さきもり)・駅馬(はいま)・傳馬(つたはりうま)を置き、鈴契(すずしるし)を造り、山河を定めよ。凡そ京には坊毎(まちごと)に長一人を置け。四つの坊(まち)に令(うながし)一人を置け。戸口(へひと)を按(かむが)へ検(をさ)め、紆(かだま)しく非(あ)しきを督(ただ)し察(あきら)むることを掌(つかさど)れ。其の坊令(まちのうながし)には、坊の内に明廉(いさぎよ)く強(こは)く直(ただ)しくして、時の務(まつりごと)に堪える者を取りて充てよ。里坊(さとまち)の長には、並に里坊の百姓の清(いさぎよ)く正しくいさをしい者を取りて充てよ。若し當(そ)の里坊に人無くば、比(ならび)の里坊に簡(えら)び用いることを許す。

詔勅其の二には「京には坊毎に長一人を置け」という。この京とはどの京か。条坊がある京である。平城京以前、条坊を持つ京は太宰府と藤原京のふたつである。「大化の改新」の詔でいう京とは藤原京である。大化の改新(646年)にはすでに条坊の都市、藤原京は存在した。

## 朱雀門

大化四年(648)春正月一日、賀正す。是の夕に、天皇、難波碕宮(なにわのさきのみや)に幸す。二月八日、阿倍大臣、四衆を四天王寺に請(ま)せて、仏像四軀を迎へて、塔の内に座せしむ。大化五年(649)三月十七日に、阿倍大臣薨せぬ。天皇、朱雀門に幸して、拳哀たまひて働ひたまふ。皇祖母尊・皇太子等及び諸の公卿、悉くに随ひて哀哭(みねたてまつ)る。

大化五年に阿倍大臣が死んだ。天皇は朱雀門に出向いて弔辞を述べた。ここに朱雀門が登場する。朱雀門は内裏の正南門である。ここから南に朱雀大路が延びる。朱雀門は内裏の存在を前提としている。

飛鳥の北の平野部に造営された新都藤原京の「朝堂院」は東西230m、南北318mで周囲を回廊が囲み、中に左右対称の十二棟の殿堂・朝堂があったという。(「飛鳥藤原の都」狩野久、木下正史)

発掘記録を読むと藤原京の造営では、まず条坊制の街路を作った。しかも、通常は建設されない84ヘクタールの「宮城」内まで延びていた。造営に当たってまず道路を建設してそれから宮城を建設していった。その際、道路の予定地に深い谷があり、その谷に下る丘の斜面に墓があって、その墓は、埋納物が除去され、丁寧に埋めもどされていたと記録している。

藤原京と難波宮は竹内街道によって結ばれている。大阪と奈良を分ける葛城山脈を竹内峠で越える。この峠はそれほど困難ではない。後の平城京では大阪と奈良を結ぶ街道は生駒山の暗(くらがり)峠を越える。ここは難所である。古代奈良・大阪の文明が大和川流域に発達したのは地理的に優れているからである。

竹内街道（大道付近）



## 大化の改新の天皇

蘇我氏を倒して政権を確立した天皇は元号を大化と改め政治改革を断行した。この天皇は九州天皇家の天皇ではない。日本國の天皇である。

## 大安寺資材帳に記された日本國天皇

白雉元年(650)冬十月、是の月に、始めて丈六の繡像・帙侍・八部等の三千十六像を造る。

この記事については大安寺資財帳にその記録が残る。

天平十九年大安寺資財帳に「合繡仏像参帳(一帳高二丈二尺七寸、広二丈二尺四寸、二帳並高各二丈、広一丈八尺)とあり、そのうち、はじめの一帳について「一帳、仏具脇侍菩薩八部等三十六像、右、袁智(斉明)天皇、座難波宮而、庚戌年(白雉元年)冬十月、始、辛亥年(同二年)春三月造畢。即請う者」とある。本文これと一致する。(頭注)

大安寺資財帳に白雉元年の天皇の名前がある。天皇の名前は「袁智(をち)」である。日本書紀では白雉元年(650年)の天皇は孝徳天皇である。「袁智」と「孝徳」では名前が異なる。日本國の眞の國王は実は「袁智」であった。当時の日本國の天皇は「袁智」でその宮は難波宮だった。「大化元年」(645)に日本國の王となり、上宮聖王の跡を引き継いで政治を行うと宣言し、「大化の改新」を断行した日本國の王は「袁智」天皇だった。

## 白雉の天皇の宮造営

650年、元号が「大化」から「白雉」に変わる。645年、「大化の改新」の諸政策によって、國王の実権を回復した王朝は「白雉」献上をきっかけとして元号を「白雉」と変えた。

白雉元年(650)冬十月に、宮の地(ところ)に入れむが為に、丘墓(はか)を壊(やぶ)られたるひと及び、遷(うつ)されたる人には、物賜ふこと、各差(しな)有り。即ち、将作大匠(たくみのつかさ)荒田井直比羅夫(あらたいのあたひひらぶ)を遣して、宮の堺標(さかひのしめ)を立つ。

白雉三年(652)秋九月に、宮造ること已に訖りぬ。其の宮殿の状、殫(ことごとく)に論(い)ふべからず。冬十二月の晦に、天下の僧尼を内裏に請(ま)せて、設齋(をがみ)して大捨(て)て燈燃(た)す。

白雉元年(650)冬十月に「墓」を移し、整地を行って建てた新しい宮が完成した。650年2月9日に、穴戸國(彦島)から白雉が献上された。今まで「白鹿」「三足の鳥」「白雀」などは献上されたが「白い雉」とは、誠に「休祥(よきさが)」だと喜ぶ。これは「難波宮」にいた袁智(斉明)天皇の新居の完成を祝う記事である。藤原京大極殿の完成ではない。

藤原京・大極殿は、正面九間(45m)、側面四間(20m)、平城京の第一次大極殿とほぼ同じ規模で、重層で、基壇を含めると、高さ二十五mを越えたと云われる。藤原京大極殿造営の記事は日本書紀にはない。大化元年(645年)にはすでに存在した。ではいつの時代に藤原京は作られたのか。

日本國天皇は「上宮法皇(法興)」-「山代王」-「袁智(大化)」と三代続く。山代王の時代は蘇我氏が専制した時代である。京をつくることは無理であろう。すると藤原京は上宮法皇の時代には存在していた。上宮法皇は遣隋使、遣唐使を派遣した日本國の王である。随からの使者、唐からの使者は日本國を訪れている。これらの国賓を接待したのは日本國の京である。その京とは藤原京である。

今年、2010年(平成21)は「平城遷都1300年」である。祝賀の行事が奈良にて行われている。しかし、考えてもみてください。平城京より早く、奈良明日香には藤原京が存在した。輝ける都がすでに飛鳥に存在していた。祝賀すべきは初代条坊都市藤原京である。

藤原京は上宮法皇に時代にはすでに存在した。710年、近畿天皇家の京「平城京」が出来るまで、約100年間、日本國の京であった。藤原京と難波は竹内街道によって結ばれていた。大阪と奈良を分ける葛城山脈を竹内峠で越えこの街道が終着するのは橿原市・高殿町、つまり藤原京・大極殿である。



藤原京・大極殿  
(橿原市教育委員会作成)